

【意見投稿】

## 日本光学会幹事選挙について

日本光学会会員

伊藤雅英（筑波大学）・井上康志（大阪大学）・梅田倫弘（東京農工大学）  
岡 和彦（北海道大学）・岡田佳子（電気通信大学）・尾松孝茂（千葉大学）  
川田善正\*（静岡大学）・菊田久雄（大阪府立大学）・志村 努（東京大学）  
辻岡 強（大阪教育大学）・中川 清（香川大学）・中野隆志（産業技術総合研究所）  
早崎芳夫（徳島大学）

会員の皆様、日本光学会の幹事選挙の様子が、昨年から変わったことにお気づきでしょうか。一昨年までの選挙では、幹事候補者と定員が同数であったため、選挙は信任投票となっていました。しかもすべて幹事会からの推薦候補者を信任する形となっておりました。しかし、昨年から一般会員からも推薦者がでたために、実質的な選挙を行うことになりました。日本光学会の歴史においてはじめての、画期的な出来事だったと思います。

その一方で、私たちが推薦候補者となった行動が突然だつたために、不思議・唐突に思われた方もおられたと思います。その経緯について説明させていただくとともに、私たちが考えていることを皆様にお伝えして、一緒に今後の日本光学会の将来について議論していくきっかけになればと思います。

私たちは、日本光学会の現状について、少なくとも以下の点に危惧と危機感をもっております。

- ・日本光学会の方向性、ビジョンがみえず、またその議論の過程もみえない

日本光学会の幹事は、雑務に忙殺され、学会が目指すべき方向性を議論する時間がとれないとの話を、よく幹事経験者から聞きます。これまで日本光学会が目指すべき方向性をきちんと議論してこなかったために、将来計画委員会からの答申書（「光学」第31巻第7号, pp. 585-587）および会員のアンケート結果（「光学」第31巻第4号, pp. 341-344, 50周年記念号）にも認識されているように、「光学会は光学の分野の中で偏った分野しかカバーできていない」「光産業界から期待されていない」「アカデミックに偏っている」「幹事会運営、幹事の選出方法が硬直化してい

る」などのたくさんの問題点が表面化している現状になっていると思います。

- ・幹事長選出および幹事選出過程が一般会員にはわかりにくい

日本光学会の幹事選挙および幹事長の選挙が、一般の会員からはわかりにくいものになっていると思います。これまで自ら立候補して幹事になろうとする人がいなかつたという事情もありますが、結果として順送り人事になっていたり、幹事の所属や専門分野が固定化してしまっている傾向も否めません。

- ・学会運営が会員のボランティアで成り立っているため、一部の会員に対する負担が大きい

日本光学会の運営は、多くの会員のボランティアで成り立っているため、各事業の担当委員、担当幹事に雑務が集中しております。そのため雑務の処理で疲弊してしまい、企画など知的業務に集中するための時間、エネルギーが失われております。

このような問題を議論し、解決方法を模索するべきであると考え、私たちはこれまで、2000年春季応用物理学会でのナイトセッション、Optics Japan 2000（北見）でのナイトセッションなどに参加させていただき、意見交換を行ってきました。また、機会あるごとに独自に集まり、日本光学会の将来性について、議論して参りました。

これらの議論を通して、より積極的にかつ実質的に、光学会の将来を模索するためには、幹事として学会運営に参加し、幹事会で議論しながら改善していくことが必要であるとの結論に至りました。これにより、幹事選挙に一般会員からの推薦候補者として、私たちが名前を連ねることに

\*E-mail: kawata@eng.shizuoka.ac.jp

なったわけです。

私たちは、次の基本の方針が日本光学会の将来を考えるうえで、重要なと思っております。

- ・情報公開の推進と、時代のニーズに合わせた学会運営のあり方の模索
- ・関連する学会等と連携するとともに、社会への発言力を大きくする
- ・若手研究者の研究環境をバックアップし、萌芽的な研究を育成する

これらを遂行するには、現在の幹事会が抱える仕事内容のうち、学会運営や方針の決定にかかわる部分と、事業を円滑に進める実務部門とをうまく整理する必要があります。つまり、日本光学会の最高意思決定機関である幹事会の改革が何より重要であり、そのためには積極的にこの課題に取り組む幹事の選出が必要だと思います。これらの課題に対する解決策を議論するために、幹事への推薦候補者とさせていただきました。

昨年度は、「一般会員からの候補者」の中から、数名を「幹事会推薦候補者」として推薦いただき、われわれの意見を幹事会で発言できる足場を作ることができました。しかし一方で、残念ながら、「一般会員からの候補者」は、全員落選との結果になりました。これは、会員の皆様に対する私たちの説明が不十分だったため、多くの方に理解していただけなかつたことはもちろんですが、現在の選挙方法では、会員の声を十分幹事会に反映すること、一般会員が幹事として幹事会に参画することが困難であるとも感じています。

そこで、私たちは、幹事会を日本光学会の将来性を議論するための実質的な組織とするための第一歩として、幹事長および幹事の選出方法の改善を早急に議論していただき下記の案を提案いたします。

#### 1. 会員の選挙による副幹事長の選出

幹事長には学会のリーダーにふさわしい方を、会員の選挙で直接選出するのがよいと思います。本来は幹事長を直

接選挙すべきですが、突然会長に就任するよりは少し準備期間を設けたほうがよいと思います。そこで、副幹事長を会員の直接選挙によって選び、その方に一定期間副幹事長を務めていただいた後、幹事長となっていたいただくという方法をとることを提案します。これにより、学会運営の継続性もスムーズに保たれると思います。またこのことで、前幹事長が幹事会に残る必要はなくなり、内規第3章18条は「前幹事長の処遇」の規定 (<http://annex.jsap.or.jp/OSJ/>) は不要となります。

#### 2. 日本光学会の幹事の構成、役割、選出方法の見直し

現在は、幹事会が推薦する段階で、その推薦者に担当していただけた実務を決めてしまっています。自ら進んで幹事になろうという人がいない状況ではいたし方のないことかもしれません、そのため事業内容が硬直化し、新しい展開を行う妨げになっていると思います。また担当が決まっているため、選挙を行いながらも幹事会推薦以外の候補者が当選しては困るという状況になっており、一般会員からの参画がしにくい大きな原因なっていると思います。また、幹事数が多くすぎることによる弊害もみられます。幹事会が学会運営の実務のみを行うのであればこれでもよいと思いますが、学会の方向性や戦略を議論していく場でもあるはずですので、幹事以外の会員の声も反映できるような仕組みになっている必要があると思います。現状は、幹事の互選により幹事長を選出し、その幹事長が中心となって次の幹事を決めるというサイクルになっており、開かれた幹事会といえる状況にはなっていないと思います。

幹事会が日本光学会の最高意思決定機関ですので、会員からの声を幹事会に十分反映できるようなシステムを作ることが、学会の将来を議論するうえで、最も重要、最も基本的な点だと思います。今回の私たちの行動が、会員の皆様に学会の将来、方向性を考えていただく問題提起になることを願っております。是非、会員の皆様の忌憚のないご意見を多数お聞かせください。